

# 2022.7.31実践交流会のまとめ

於：能登川コミュニティセンター 3F 多目的室 4

## 1. 1学期の実践についての総合的な評価

「一日一漢字」と「漢字音読名人」については、どの学校も肯定的に評価している。各学校から共通に報告された内容を以下にまとめてみた。

- ◎子どもたちが漢字学習に楽しく取り組んでいる
- ◎学習を拒否していた子どもたちが前向きに参加するようになった。
- ◎漢字に関心を持つ子が増えた。
- ◎漢字を読む力は確実に向上した。
- ◎漢字を読む力の向上とともに読書力が向上した。
- ◎文章を書く力が向上した。
- ◎子ども同士の関係が温かくなった。

一方、「漢字の書きの定着」という部分においては評価が分かれた。

漢字書き名人については、例えば50問テストを例にとると、成果がとても見られるという報告がある一方で、確かな成果を実感できないという報告も相次いだ。特にドリルを用いた時より少ししか書かせないことによる不安と、成果も従来以上には上らず、保護者からもドリルを購入して欲しいという声が出た、ということも報告された。

正反対の評価がなぜ起きるのか。また、従来の漢字ドリルとこの新しい方法の違いは何なのか。それを明らかにすることが今回の実践交流会の主要テーマであった。

## 2. この学習方法と従来のドリル反復練習法を比較する

### (1)二つの評価

市販の漢字テストの成績が従来のドリル反復書き練習を超えるものになっていないために、この学習そのものへの不安・不信感を抱いてしまう、という学校があった。

[能登川東小]

- ・指導している教師の中には、「これで習得できているのか？」という不安がつきまとう。
- ・学期末や単元末の50問テストや小テストでの実績が上がっていないケースがある。
- ・1学期中に2件、保護者から市販のドリルを使わせたいという申し出があった。

[雄琴小]

・教師、子ども共に戸惑いの方が大きい。教師ではベテランになればなるほど、子どもたちは高学年になればなるほど従前の指導法、学習の仕方に慣れているので、新しいやり方に先の見通しを持ちにくく不安を感じている様子。

[蒲生北小]

書き名人のプリントだけでは、漢字の定着につながっていないように感じる。

一方、この学習法で着実に書く力を伸ばしている事例が3校から報告された。

### 市原小の実践報告

#### ・子どもたちの感想

- ・わたしはプリントの方がやりやすいです。(3年)
- ・ドリルより簡単で点数が上がってうれしい。(4年)
- ・漢字が覚えやすいから、テストで60点以上取れるから、ぼくはプリントがいいと思います。(4年)
- ・覚えやすいし、楽しく学べるのでとてもわかりやすいです。(5年)
- ・50問テストで良い点が取れたのでこれからも生かしていきたいです。(6年)

6年:1学期末の漢字50問テストの学級平均点は82点

市販のドリル練習より簡単で取り組みやすいと市原小の子どもたちは答えている。

「子どもにとって、ドリルより簡単で負担感は少ない」という感想自体は、各実践校からも上がっているのだが、50問テストで結果が出ないので否定的評価を下している。しかし、市原小では、確かな結果も伴っている。6年生の50問テストは、リハーサル無しの一発勝負で行ったと担任は言っている。多くの学校が、50問テストのコピーを配布して事前練習させた上で行っていることを思えば、この成果は驚異的と言える。

### 五個荘小4年の実践報告

○一学期末は、平均点アップ(55点から76点) まだまだの結果だが、20点は上がった。

#### 4年生の子どもたちの姿

- ▲発達の課題を抱える児童が多い。(すぐに切れたり、飛び出したりする児童がいる。)
- ▲幼い児童が多く、話が聴けない。(必要な発達段階を経していないように感じる。)
- ▲算数の教具が使えなかったり、交差点に点を打てなかったり、漢字の形が整わなかったりなど、見え方や力の入れ具合に課題のある児童が多い。
- ▲次々と興味がつり、朝の準備ができない児童が大半。

五個荘小4年生の4月当初の姿は、左のようであったという。

いわば学級崩壊に近い状況からスタートしており、5月時点で漢字のテストをしても最高点が70点ぐらい、0～30点の

子どもも少なくなかったという。それが、学期末には50問テストの平均点が76点。90点以上の子が10人以上というところまで向上した。無論これも本番テストのリハーサル無しである。とりわけ低位の子どもたちの伸びが著しかったという。

#### ■大石小6年

50問テスト①②90点以上 8人

大石小には、この漢字学習に充てる時間枠が全くなく、算数・図工・総合などの教科の隙間時間を使っての取組であった。(特別支援学級の子も参加できる教科の時間で行ったとのこと)

そのような厳しい条件での取組であったにも関わらず、50問テストで90点以上が8人という成果を上げている。

この学級を5年生で担任した教師によれば、「5年生では、90点以上取れる子は1～2名だったので、この結果に驚いている」とのこと

この他、秦荘東小3年担任からは、「従来のドリル反復練習方式を超える成果は出ていないが、この学習方式で、極端に漢字の書きの習得率が落ちているということではない。」という発言もあった。

子どもたちの状況が厳しくとも、学習時間が十分に確保できない中であっても、着実に書く力をつけているという確かな事実がある。「この学習では書く力がつかない。従来のような反復書き練習の方が有効だ」というようなことでは決して無いのである。

では、成果の見えなかった学校はどこに問題があるのか。後段で詳述する。

### (3) 「漢字50問テスト」では見えない部分の評価

「読み優先の漢字教育をやってきて、そのゴールが『50問テスト』なのか？もっと違うゴールがあつていいのではないか？」という参加者からの発言に象徴されるように、50問テストの結果からは見えない部分を含めて評価すべきであるということが協議の中でクローズアップされてきた。

「50問テスト」の一点で見れば、従来のドリル反復練習でもそれなりの結果は出せる。事前のリハーサル練習を数回繰り返した上で本番テストをやらせれば、一定満足いく結果も出せるだろう。しかし、我々の提唱する学習方法でも、事前のリハーサル練習をすれば、同等の結果は出るに違いない。市原小3年担任が次のような感想を述べている。

漢字テストの結果だけで言えば、従来の反復書き練習に比べて、できが悪かった。  
でも、間違った漢字のおさらいをしてみたら、子どもたちが『ああ、そうだった。』『そういう意味の漢字だった』とたやすく思い出した。従来のやり方だったら、書けない漢字は全く覚えられていなかった。

インプットはできている。それを引き出すインデックスの部分さえ強化すればたやすく書けるようになるということである。市原小6年担任も五個荘小4年担任も、従来のような形式的反復書き練習はさせないけれど、授業の合間合間に「この前の漢字覚えてる？」と軽くおさらいをする、ということは意識的にやっていると報告している。つまり、インデックスの部分強化することで、潜在的な書きの能力が引き出されるということである。

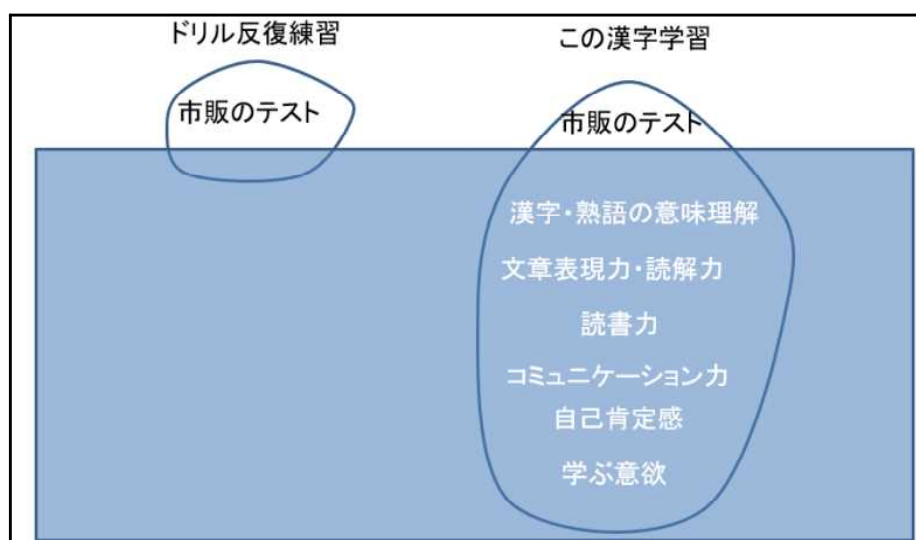
それよりもっと重要なことは、点数では見えない部分の評価である。

従来のドリル反復練習との違いを冰山モデルで図示すれば、右図のようになる。

水面上の目に見える「点数」だけ見れば従来の方式より特段優れたものには見えない。しかし、水面下に隠れ

ている能力の部分に目を向ければ、全く違う景色が見えてくる。

その違いを項目ごとに比較検討してみると次のようになる。



評価項目	従来のドリル反復練習法	この学習法
取り組む意欲	真面目に取り組む子と取り組まない子の二極化。学びにくさのある子には意欲が持てない。	学びにくさのある子も含めどの子も意欲を持って取り組める。
漢字・熟語の意味理解	表層的な理解にとどまる。	漢字の成り立ち、実際の生活場面とつなげた意味理解ができる。
漢字を読む力	書きの習熟が重点なので、読みの練習は不十分。学びにくさのある子は読めないまま放置されがち。	漢字音読名人で十分に読み込むので、どの子も提出された漢字が読めるようになる。
文を読み込む力 読書力	漢字が読める子と読めない子で二極化。	それぞれの子の力に応じて、音読、文章を読み込む力は着実に育つ。読書力は確実に上がる。
漢字を書く力	テストの穴埋め問題は反復書き練習すればクリアできる。	正しい学習方法を守ってやれば、反復書き練習より少ない書き練習量で書けるようになる。
文章を書く時に漢字が使える	単漢字・単熟語の書き練習なので、文の中で使う力は育ちづらい。	一貫して「文で行う」学習なので、文の中で漢字を使う意識は確実に育つ。
子ども同士の関係性	個人の取組であり、他者との関係性は「競争」以外には無し。	誰とでも気軽に話せる、開かれた温かな関係が育つ。
自己肯定感	書きテストで点が取れない子は「自分は力が無い」と思ってしまう。	「自分もできる」「友達と対等にやれる」という実感が自己肯定感を高める。
指導時間・教師の負担感	国語の時間の新出漢字指導と家庭学習。特に教師の負担感はない。	一週間、帯で確保することの難しさ。やり方に慣れるまでの教師の負担感は大きい。

上記のことを裏付ける実践の事実がいくつも報告された。

・「4～5年の頃は、男女の仲がとても悪かったようだが、6年になってずいぶん変わった。仲良くなっている感じがする」と複数の保護者が懇談会で述べている。(市原小6年)

・全く宿題などやらなかった子が漢字書き名人を書くようになった。  
 ・テストに手をつけようとしなかった子が、見ながらではあるけれど、書くようになった。  
 (五個荘小4年)

・子どもの読書量は確実に増えた。(甲良西小)

おそらく、これに類する事例は各学校にも多く生まれているはずである。

つまり、「漢字習得の一方法」という狭い捉え方をすると評価を誤る。子どもの生きる力を育む「教育」という視野において評価すべきではないか。そうすることによって正当な評価も得られるようになるはず、という結論になった。

### 3. 確かな「書く力」がつくために

「こんなに子どもたちが漢字が学習が楽しいと言っているのに、しかも意欲的に取り組んでいるのに、『ドリルの時以上の結果が出ない』なんて、どうして？」という発言が参加者からあった。確かに、従来の漢字学習に比べれば、比較にならないくらい深く厚みを持った学習が展開されているのだから、市販の50問テストくらい軽くクリアできるはずである。にもかかわらず、そうならない学校が大半であるという。これは大問題である。どこに問題があるのか。協議、分析の結果を以下に述べる。

#### (1) 一日「2漢字」のオーバーペース

[雄琴小]

本校ではパワーポイント資料を一括してクラウドに上げ、担任はそこにアクセスして教室に投影して使っていたので、事前の準備がほとんどいらなかった。漢字の成り立ちなどは従前の指導法ではほとんど触れることができなかつたので、単漢字の持つ歴史や意味に触れられ、イメージを持つことができた。

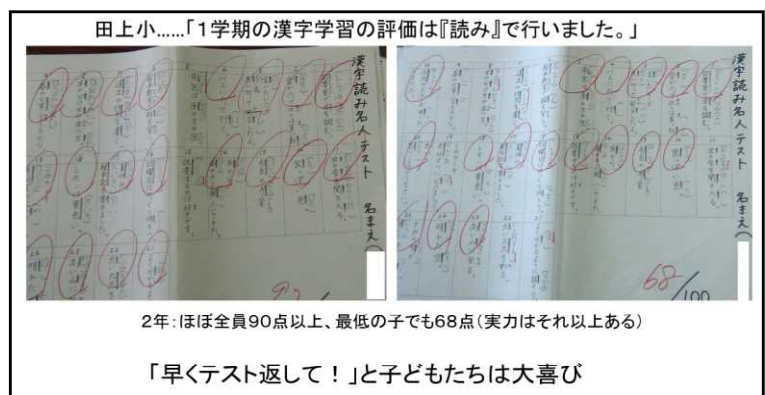
一方で子どもたちからの意見や考えを引き出せば引き出すほど時間がかかり、1学期の配当漢字の多さと相まって、モジュールの時間内で収まりきらなくなった。本来の趣旨であれば、この初めての漢字との出会いを大切に、しっかりイメージを膨らませることが重要であるが、1学期後半はその時間がなかなか取れなかつた。

光村図書の場合、配当漢字の45%が1学期に提出されている。それを指導し切るためには、一日2漢字ペースで進めざるを得ない。しかも学期末には「書き50問テスト」のゴールがある。そうした教師のあせりが指導の上滑りを生じ、子どもの理解のキャパを超え、確かな漢字学習につながらなかつた。「子どもとじっくり考え合う時間が取れなかつた」という雄琴小の総括は、取り組んだすべての教師の実感でもあった。

この現状を捉え直すものとして、田上小の実践は参考になる。

田上小では、1学期の漢字学習の評価は「書き」ではなく「読み」で行ったとのこと。音読名人で読み込んでいる子どもたちなので、ほぼ全員が90点以上取れ、子どもたちも自分たちの努力が実を結ぶ形になりとても喜んだとのこと。

この田上小の実践は、指導要領準拠になっていることをここで確認しておきたい。



### 【学習指導要領の規定(3. 4年の場合)】

○第3学年及び第4学年の各学年においては、学年別漢字配当表の当該学年までに配当されている漢字を読むこと。また、当該学年の前の学年までに配当されている漢字を書き、文や文章の中で使うとともに、当該学年に配当されている漢字を漸次書き、文や文章の中で使うこと。

「1学期に習った漢字は確実に読めるようにすること。しかし、書きについては、2～3学期、次学年までかけて書けるようになればいい」という指導要領の基準に従えば、「読み50問テスト」でほぼ全員が90点以上の田上小は、指導要領の基準を見事にクリアできているということになる。

また、「読みの習得」をゴールにすれば、書きの指導を焦る必要はなくなる。例えば、新出漢字については一日2漢字ペースで教えるにしても、漢字書き名人については、「一日1枚一漢字」とし、指導しきれなかった分は2学期に回すということもできる。市販のテストの漢字の部分も未習漢字は省くという対応をすればよい。(※甲良西小2年では、一部の漢字の書きは2学期に送るというやり方をしたとのこと)

こうした取組を進めるためには、教師の共通理解、保護者への周知が必須である。「習った漢字はほぼ同時に読みも書きもできなければならない」という誤った固定観念を捨て、「子どもの学び」という視点に立てば、理解は必ず得られるはずである。

#### ※補足

教科書の新出漢字が1学期に偏重されている理由を光村図書に問い合わせたところ、次のような回答を得た。

小社では、新出漢字の提出が、1学期…45%、2学期…40%、3学期…15%の割合になることを目安として、編集をしております。1学期に多くあてております理由としては、次のようなことが挙げられます。

- 1 漢字学習は、何度も何度も目にふれさせることで、繰り返し書いたり読んだりの学習が可能になると考えています。  
できるだけ早い段階でその漢字と出会い、その後何度も出会うなかで、たしかに習得していってもらうことをねらっています。
- 2 頻出する語句や、学習に必要な用語に関しては、なるべく最初に出てきたときに新出漢字としてとることで、1冊の本の中での表記を統一したいという思いもございませう。
- 3 3学期は、なかなか漢字学習にまで手が回らないと、現場の先生方からご意見をいただきます。そこで、3学期に学習する新出漢字は少なくすむよう配慮しております。  
以上が、新出漢字を1学期に多めに提出しようという考えのもととなっている理由です。  
(なお、現行版では、4年生の新出漢字の数が、1学期にほぼ50%となっております。こちらは、社会科との関連が図れるよう、現行の学習指導要領から4年生で学習することになった都道府県漢字を1学期に学習したほうがよいという判断からのこととなります。)

「早期に提出し、その後何度も出会うなかで確かな習得」とあるように、決して一時の指導で覚えさせることを求めているのではない。文科省も教科書会社も、「時間をかけて習得させればよい」としているのである。このことを学校現場はしっかりと受け止める必要がある。

## (2)学習枠の課題

確かな成果につながらない2つ目の原因は、「学習枠」が一週間通して確保できないことにある。飛び飛び、不定期の取組では学びに向かう子どもの姿勢もあいまいになる。学びが積み上がらず、確かな成果が出ないのは当然の帰結ともいえる。

多くの学校が時間確保に苦しんでいる中、五個荘小4年では、全くスキルタイムが無いにも関わらず、一週間通して学習枠を確保し、学習をルーチン化することに成功している。その取組を以下に紹介する。

### ①五個荘小モデル

8:15～8:20 **音読名人**

- ①放送の音楽の間……自分で練習
- ②鳴り終わったら……友だちと聴き合い

8:20～8:25 **朝の会**

8:25～8:35 **一日一漢字(2字)**

五個荘小の漢字学習の枠組みは左のとおりである。

始業時間前を「漢字音読名人」の練習・聞き合いタイムとし、朝の会をコンパクトに進め、1校時の始まりまでの隙間時間を「一日一漢字」の学習に充て、

一週間通して行いルーチン化させるというものである。

4月当初、登校しても朝の会が始まるまで準備が終わらない子が大半という状況であったにも関わらず、6月の訪問時には、右写真のように、始業前、友達との聞き合いを自主的に進めている姿があり、崩れた雰囲気は全く感じさせなかった。

ここに至るまでの担任の取組方針は次のとおりであった。



#### ◎毎日同じ時間に漢字に取り組む

・朝の準備が終わっていない児童がいても、とにかくその時間になったらスタートする。

○まずは取り組める子に視点をあて、その子たちが自分たちでできるようにし、その後課題のある子に手をかけると、学級全体が取り組む雰囲気になっていく。

「時間が来たら始める」というルールを教師が守り切ることで、意識の高い子どもたちから徐々に学習に向かい出した。学級集団としてそれが成立してくると、参加しない子への対応は子どもに委ねた。友達から声をかけられることで、外れていた子も参加するようになっていった。そして、1学期末には、特に課題の重い2人以外は問題無く取り組む学級になったという。

「ルーチン化」と「子ども同士で引き出し合う」は学習集団を育てる鉄則だということが五個荘小の実践から見えてくる。

### ②甲良西小モデル

甲良西小では一週間通して、左の時間を確保している。

8:35 ～ 8:50 せせらぎタイム(漢字学習)  
13:40～13:50 全校読書

その時間の捻出方法は、漢字学習については、国語科の授業のモジュール化で対応し、全校読書については、読書は理科や社会全教科の学習にも該当するとして、国語科以外の教科の時間を割り当てているとのこと。「今年度は漢字学習と読書活動を校内研の柱とし、全校体制で取り組む」という明確な方針が校長から出されたことで、こうした思い切った日課表の編成ができたとのことである。

### ③田上小モデル

「つみあげタイム」15分に移動時間5分を加えて20分間を確保している。

13:05		ひるやすみ (25分間)	ひるやすみ (25分間)
13:30			
13:35		移動 (5分間)	
13:50		つみあげタイム15分	
14:35		第5校時	

スキルタイムについては、多くの学校が読書・計算などとミックスさせて活用しているのに対し、田上小では「漢字学習で一貫させる」という方針が明確にあるので一週間通して20分の漢字学習の枠が確保できている。

次年度の週時程を立案するとき、甲良西小や田上小モデルは大いに参考になる。

## 4. 各教材の指導ポイント

この学習で確かな成果を実感している学校とそうでない学校の違いは、基本的な「やり方」そのものに違いがあるのではないかと。1学期の取組を検証し、2学期以降の取組をより明確にするために、各教材の指導ポイントをもう一度確認し合った。

### (1) 「一日一漢字」

「一日一漢字の学習は、『教師と子どもで楽しむ時間』にする。この学習での楽しい体験がそのあとの漢字音読名人や書き名人につながる。」と、不登校児を相手に指導されている先生からの発言があったが、まさにそのとおりと云える。



漢字の成り立ちを類推するのはとても楽しい。子どもたちの自由な想像を受け入れる。  
 ※漢字音読名人のテキストを広げながらやっている学級もあるが、何も見ない方が楽しく推理できる。  
 説明文を子どもと一緒に読むことで全員参加になる。



ここは素直に音読み・訓読みをみんなで斉読すればよい。



◎最も重要な部分。  
 ここで子ども達全員に「文作り」を体験させたい。[試案]  
 ①例文を斉読  
 ②近くの子同士で考えた文を自由に出し合う(短時間でいい)  
 (確実にどの子も一文は考えられるようにする)  
 ③発表：「この列の人言って」「〇班の人言って」という形で発表させた後「その他にある人言って」と挙手発言。  
いつも特定の子が発言する形にならない工夫。

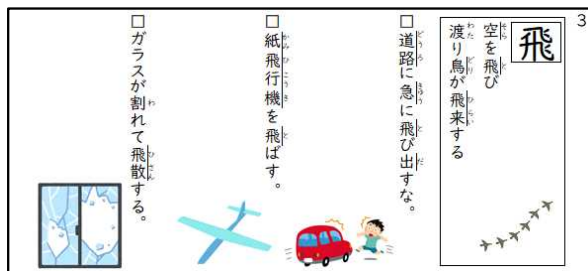


文を板書するのに時間がかかるため、長い文での発表は「〇〇が××した」と短く板書。ただし、単語単位ではなく必ず「文」で書く。

発言が続いて、切れないということも多い。意欲は大切にしつつ、「3人まで」にして、残りは「言いたい人は、後で聞かせて」として収める。



筆順練習は、「見ないで書けるまで練習」というルールを徹底させる。「目をつぶって書く」「後ろを向いて書く」など。



筆順練習に続いて「飛」の漢字音読名人斉読。「意味の分からない言葉があったら言って」と意味確認を必ず行う。

これを行うことで、全員が漢字音読名人の土俵に乗れる。

※参加者から「一日一漢字に漢字音読名人が付け加えられたデータになっていると、スムーズにつながる」という声があり、改正データを作成予定。

## (2) 「漢字音読名人」

### 漢字音読名人に取り組む各校の子どもたちの様子



取り組んでいるすべての学校で、こうした生き生きと聞き合う子どもたちの姿が見られているのはとてもうれしいことである。しかし子どもたちの聞き合いの姿を丁寧に見ていくと課題も見えてくる。

- ①相手が読んでいるのをきちんとテキストで確認しながら聞かずに、適当に聞いてサインしている子がいる。
- ②もっと十分に読み込ませたいのだが、「3人サインを集めたら OK」というルールが先走り、不十分な読みのまま、次に進んでしまっている子がいる。
- ③クラスに何人か、参加しない子がいる。

#### ①についての対策

##### ◎教師のきちんとした教示を行う

「自分が一生懸命読んでいるのに、いい加減に聞かれたらうれしくないね。間違っただままで OK にされてもいやだね。読む力をしっかりつけるためにやっているんだから、相手が読むのはきっちり聞こうね。そして、間違っているところは、遠慮無く指摘しようね。」等。

#### ②についての対策

早く次に進みたいという子どもの気持ちを潰すことなく、読みに習熟させる方法として、蒲生北

小がやっていた「一回で合格、三巡方式」が有効ではないか。「一度に3回読んで終わり」より、一回合格で進み、終わりまで行ったらまた二巡目、そして三巡目という方が、記憶の定着はより深くなる。

### ③についての対策

五個荘小の実践のように、子ども同士で声を掛け合う、ということは有効。でも、それでも動けない、特に学びにくさのある子には配慮が必要。

それでも難しいという子にはどうすればいい？

いくつか、やり方を提案し、「どれならやれそうかな？」とその子に選ばせる。

- ① 音訓カルタの例文が読めたらOKにする
- ② 3文のうち1文読めたらOKにする
- ③ ヒントを教えてもらって読めたらOKにする。

あくまで、教師が決めるのではなく、子どもに選ばせる。「これならできそう」ということを子どもに選ばせることで、その子の主体を起こすことができる。

### ●「漢字音読名人に取り組む時間が無い」

「スキルタイムで「一日一漢字」をやっていると、漢字音読名人の聞き合いタイムが取れなくなる」という悩みが多く、学校から出されている。

これについては、五個荘小実践のように始業前の時間帯とか、掃除終了後など、隙間時間を見つけて実施するしかない。

最初はきちんと時間を確保して、聞き合いのやり方を身につけさせる。そして、子どもたちのやる気が表に出てきた段階から、隙間時間を活用して行っていく。たとえ短時間でも、毎日続けることが鉄則である。毎日続ければルーチン化し、自分たちで自主的にやるようになる。そして読みの習熟が確実に図れる。

※漢字音読名人に取り組む時間が無い学校の場合

◎「漢字音読名人」の聴き合いは、すきま時間に行う。

- ① 朝の始業前。(五個荘小)
- ② 掃除が終わって5時間目が始まるまでの間。

毎日、短時間。取組をルーチン化させる。

### (3) 「漢字書き名人」

#### ①基本の確認

「漢字書き名人だけでは定着しない、もっと書き練習が必要」と評価する学校の場合、手引きに示したとおりに活用できていないのではないか。それをチェックするため、「漢字書き名人」の基本的な使い方について、もう一度取り組み方を確認し合った。

◎練習する書き名人は、1週間前に習った漢字

	月	火	水	木	金	月	火	水
一日一漢字	任・現	際・能	飼・似	格・情	像・象	解・技	複・興	許・可
書き名人						任・現	際・能	飼・似

【その意図】

- ◎確実に読めるようにしておいてから、書き練習に入る。(読み優先)
- ◎時間を置くことで、より確実に記憶が定着する。

基本的な使い方について、もう一度取り組み方を確認し合った。

☆上は折って隠す

◎脳裏でシミュレーションした後、問題文だけ見て書く。  
◎正しく書けなかった文は、同様にして再チャレンジ

**このルールの徹底が重要**

「この漢字を使った文を考えて書こう」

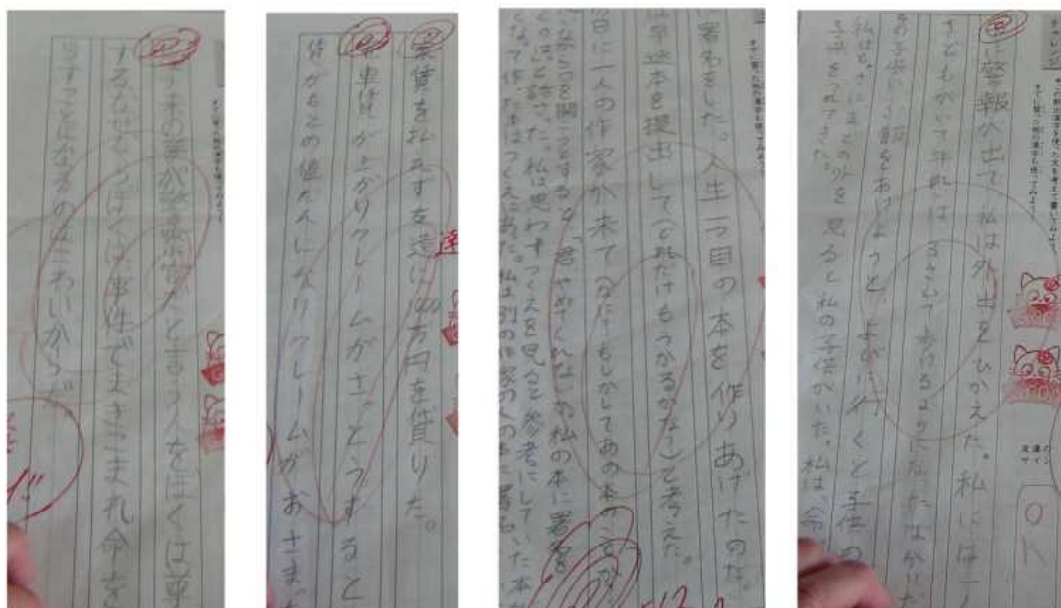
☆ここが書き名人で一番重要なところ  
スルーしてはいけない!

## ②創作文作りの取組の差

1 学期の取組で漢字 50 問テストでも確実に力の向上が見られた学校と、そうでない学校との決定的な違いは、この創作文作りの取組にあったのではないかと。

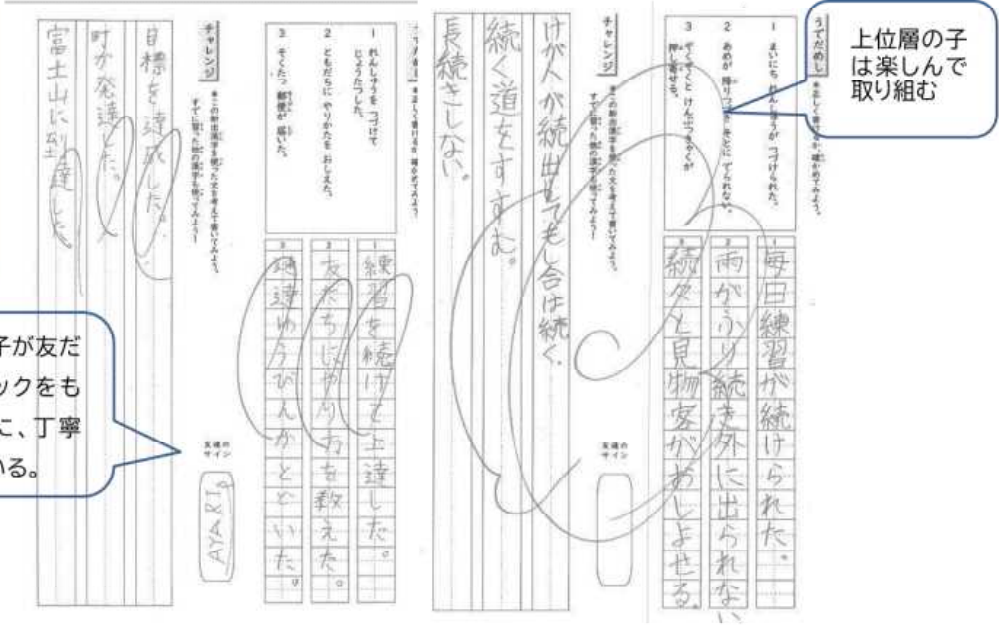
成果の出ない学校では、「創作文作りに困っている子が多い」という報告だったのに対し、成果を上げた学校は例外なく、「この漢字を使った文を考えて書こう」の指導がきちんとなされ、子どもたちが意欲的に書いていた。

市原小6年の子どもたちが書いたチャレンジ作文[5月段階]

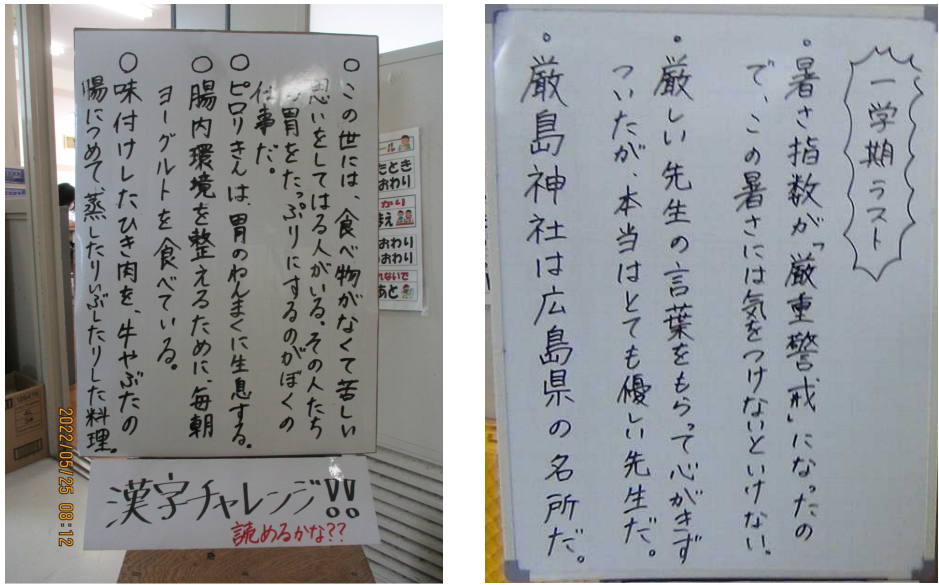


五個荘小実践

下位層の子が友だちのチェックをもらうために、丁寧に書いている。



■大石小



つまり、次のように言えるのではないか。

創作文作りに意欲的に取り組んでいる子

= 漢字を書く力も伸びている

創作文作りに困っている子

= 漢字を書く力も弱い


実践校の中には、文作りで困っている子に対して、先生が「チャレンジ欄は飛ばしてもいいよ」とか「右の例文をそのまま書いてもいいよ」と教示している場合もあった。しかし、それが、「書きが定着しない」大きな原因ではなかったか。むしろ、自分の頭で考えた創作文をどんどん書き込むことで書きの習熟を図る、というのが本道である。ヒントを言って短い文でも書けるようにする、という一線を譲らないことである。

### ③従来の反復書き練習とこの学習における書き練習の違い

漢字の書き練習をもっとすべきだと考える教師や親に再度考えていただきたい。

漢字の意味をきちんと理解し、文章を書くときに適切に使う力を育てる上で、右図のどちらの方法が有効か。従来の書き練習を選ぶだろうか。

#### 創作文作り




**■子どもの意識**

- ◎「厳」の意味に合う具体的な場面を思い浮かべる
- ◎字形も確認しながら書く。

# 厳

厳しい先生の言葉をもらって心がきずついたが、本当は優しい先生だ。

#### 従来の書き練習



**■子どもの意識**

- ◎字の形を正しく取ることに意識が集中
- △「厳」の意味にはあまり意識が向かない

### ④創作文作りに楽しく取り組める手立て

「創作文を作るのが難しい」という子どもたちへの対処



【田上小6年の事例】

◎子どもが書いた文に賞をつけて紹介する



【市原小3年の取組事例】

◎「一日一漢字」で子どもの考えた文を電子黒板で表示


➔


オリジナル漢字音読名人

創作文作りを子どもたちが楽しんで取り組む効果的な指導の手立ては「子どもの書いた文を紹介する」だったという報告が各校から届いている。

田上小では、子どもが作った文に「科学者賞」「アンパンマン賞」などユニークな賞をつけて、子どもたちがタブレットでそれを見られるという実践をされている。友達の創作文に刺激されて、子どもたちがどんどん書き込むようになっている。

市原小3年では、一日一漢字の学習で子どもたちが発表した文を即座にエクセルに入力しながら読み、それをプリントアウトしたものを翌日黒板に掲示している。子どもたちはペアになって、それを読み合っている。一週間分が壁面に掲示されていて、宿題の書き名人をやるときに、その文を見て書くヒントにしているという。

注：以上の議論はその学年で新しく出てきた配当漢字の「書き」の話である。この新しい教材では、文章で実施するため常に下学年の漢字の復習が起きるといのが特徴である。従って長くこの教育法を続けた場合は、教育漢字全体への理解と記憶はドリルより多く深くなること期待される。

## 5. 子ども同士のチェック

これについても評価が分かれた。

### 教師の丸付けの負担が減った。(大石小)

[雄琴小]

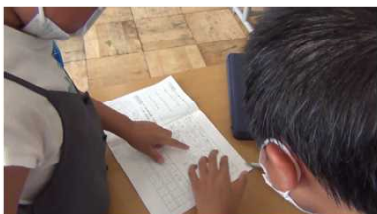
クラスの状態によって子ども同士でチェックできるクラスと、担任がチェックするクラスに分かれた。どちらにしても、細かい間違いをそのままにしておかず、担任が赤を入れるため負担を感じている担任が多かった。

肯定的な評価より、雄琴小のような否定的な評価が圧倒的に多かった。

「子ども同士にチェックさせていたら二度手間」と考え、全部教師がチェックし、それに多大なる時間を割かねばならない、ということも「書き名人」の否定的な評価の大きな要因になっている。

本当に子ども同士のチェックは無理なのか？

書き名人プリントをチェックし合う市原小3年の子どもたち  
(2022. 6. 28)



市原小3年で子どもたちがプリントを交換し、チェックし合う場面を見たが、子どもたちは全く問題無くチェックし合っていた。相手の間違いを的確に見つけて指摘し、修正する子どもの姿があった。

3年生でさえできるのだから、高学年でできないはずは無いと考えるのだが、どうだろうか。

「子どもの力では細かな間違いにまで気づけない」という評価が大半だが、それならば、気づかせたい部分をきちんと明示してやればよいだけのことである。

黒板にチェックポイントを書いておき、それを見ながらチェックさせれば子どもにもできる



左図のようにチェックのポイントを具体的に書いておく。子どもたちは、そのチェックポイントに従って、友達のプリントを見る。例えて言えば算数ドリルの答え欄を見ながら○付けをするようなものである。

チェックすべき部分がきちんと見えていれば、子どもも自信を持ってチェックできる。小さな先生がいっぱいできれば、教師の○付けの負担は激減する。

## 6. 保護者との共通理解

甲良西小では、今年度からこの漢字学習を全校体制で行うに当たり、保護者の理解を得ることが必須として、精力的に保護者への情報発信をされている。

- ①文書で保護者への周知
- ②学習参観で漢字学習の公開
- ②学級懇談会で新しい漢字学習についての説明
- ④字別懇談会を漢字学習のテーマで行う

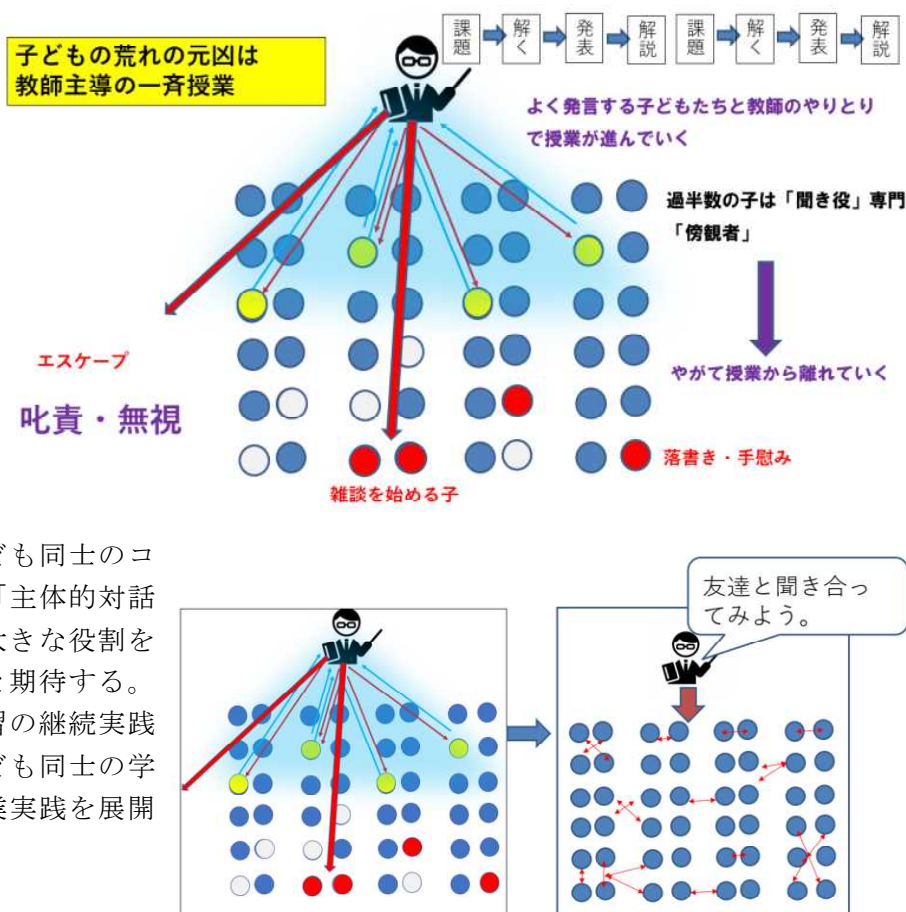
学校が何を目的としてこの漢字学習をやろうとしているのか(文が読める力をつける・自ら学びに向かおうとする子を育てる)を保護者に伝える場として、字別懇談会はとりわけ有効であったとのこと。保護者からは「これまでの説明では十分に理解できなかったが、具体的に丁寧に説明してもらったことで理解でき、よく分かった」と好評で、学校の取組を前向きに評価していただけたとのことである。

甲良西小の実践事例は、この学習に取り組んでいる各校にも大いに参考にしてもらいたい。

## 7. 子ども同士の学び合いを全教科に

今、学校で行われている授業は、大半が右図の形になっている。新学習指導要領の根幹ともいえる「主体的対話的深い学び」が提唱されて何年も立っているのに全く何も変わっていない、変わろうともしないでいる。

そうした頑迷な学校教育の状況を、打破する原動力として、この漢字学習で育まれた子ども同士のコミュニケーション力は「主体的対話的深い学び」の実現に大きな役割を果たせるのではないかと期待する。ぜひ、2学期、漢字学習の継続実践とともに、各教科で子ども同士の学び合いを中核とした授業実践を展開させていただきたい。



## 8. 総括

(1)この新しい方法は、漢字「指導」教材でなく漢字「教育」教材、と欲している。

漢字指導と考えると、漢字単体を書けるか書けないかが大きな問題となるだろう。しかし、この方法は、もっと漢字を深く理解して文章表現の中で自由に扱えることを目的としている。従って、読み書き同時進行をしない。充分読めて、漢字の意味内容が文章の用法の中で定着し、字のイメージや形が湧くようになってから書くことで、少ない書き回数で漢字も書けることを狙っている。

(2)もっと言えば、「漢字」教育でなく、「文章基本教育」教材、と欲している。

自分の言いたいことを文章で表し、他の人の文章が読めたら同時に意味が解るようになることを目指して、意味・イメージのある短文の例文を通して練習を積む。「でも」「だから」「そして」などの言葉を文章中に入れるチャレンジ文作りで構造のある文章、論理的な文章を書けることも目指している。単に漢字だけが書けることを目指している教材と思わないで欲しい。

(3)この教材で毎日ルーチン化して練習する事は重要で、漢字科と考えて、あるいは「文章基本科」と考え

て、モジュール化して時間を取って欲しい。

モジュール化する時に、技術的に国語の一部としてしか扱えず時間が取れないと考えずに、文章の扱いは全ての科目に必要なので理科や社会や算数の時数にカウントして頂いて、結果として毎日行うモジュールになるように設定して頂きたい。それに応えるだけのやり方や考え方を含んでいると思うし、何より子どもに力が付く。

(4)保護者にこの教材の狙いや主旨を説明してもらいたい。

保護者もドリルに代わる教材の主旨が分かれば安心されるだろうし、家庭で子どもに的確なサポートをしてもらえる可能性も出てくる。

(5)読書を毎日の宿題に出して欲しい。

本のジャンルは問わず、何ページ読んだかを毎日先生に報告させるだけでも効果がある。日本語は正式な文章語と口語がかなり異なっているので、特にこれは重要と考える。

(6)この教材は、その子どもの力に応じたところから始められる事、子ども同士が関わる中で子ども達がお互いを認め仲良くなれること、子どもの自己肯定感も育てられる可能性を孕んでいる。

そのことにも注意を払ってみたい。